http://tohokuhelp.com

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

東北ヘルプ
Touhoku HELP

第二回　東北日・韓キリスト者信仰回復聖会　報告（その１）　P2
第二回　東北日・韓キリスト者信仰回復聖会　報告（その２）　P4
シリーズ・福島は今　P5
「豊かさ」を求めて　P7
「見えないもの」への向き合い方　P8
「スローワーク」と共に　P9
木村真紀"響き合いプロジェクト　P11
「見えないもの」への向き合い方（承前）―戦う人・佇む人・祈る人　P13
不安に抗するために　P15
「福島の震災を語る会」参加報告　P16

No.1

News Letter

November 2012

第二回
東北日・韓キリスト者信仰回復聖会報告（その１）

９月１７日（月）、『霊よ、四方から吹き来たれ』との主題の下、仙台青葉荘教会にて、「東北日韓基督者信仰回復聖会」が開催されました。

この催事は、在日韓国基督教総協議会の皆様が「被災地のクリスチャンを励ましたい」という願いを込めて企画してくださったものでした。

第二回目となりました今回は、韓国基督教教会協議会（NCCK）から会長をはじめ７名の方がおいでになり、また、４名のアーティストの方々（崔　徳信＝チェ　ドクシン、金　秀眞＝キム　スジン、孫　愛英＝ソン　エヨン（Violin）、チェ　ハンソンの四氏）がおいで下さいました。

仙台青葉荘教会

この方々は、被災地で大きな励ましと慰めを与えてくださいました。１７日の聖会をはじめ、１６回に及ぶコンサートや祈祷会に参加くださり、延べで７３７名の方々に希望と喜びをお届けすることができたのでした。以下、数回に分けてこの催事の報告をいたします。まず最初は、聖会の説教を担当してくださった住吉先生の説教原稿をご紹介いたします。この説教の熱によって、聖会は篤く燃えたのでした。放射能被災地で働く牧師の思いを分かち合っていただくためにも、どうぞ、ご高覧下さい。

原発に向かわれたイエス
共生～共に生きる～

住吉英治牧師
聖書：ヨハネ３章１６節
ローマ書１２章１５節

第二回ー東北日・韓キリスト者信仰回復聖会を今日ここに持つことができたことを心から感謝申し上げます。この聖会において神さまの栄光が豊かに現されんことを心から祈ります。

本来ここには福島県キリスト教連絡会委員長の木田恵嗣先生が立ってお話をされるのがふさわしいのですが、木田先生のご都合により、副委員長の私がお話をさせて頂くことになりました。ご承知置き下さい。

まず最初に、昨年の３．１１とその後のことを少し振り返り、また私自身が支援活動をさせて頂くことになった原点についてお話をさせて頂きたいと思います。

2011年3月11日金曜日。午後2時46分。マグニチュード9.0。その日私は買い物中でしたが、浜通りの保育所で働く妻を助けるため、すぐに保育所に向かいました。その時大津波警報１０㍍が発令されていました。保育所に着いた時、子ども達を返すまでは妻を連れて帰れないことが分かったとき、死ぬなら妻と一緒だと覚悟しました。テレビを見ると、近くの漁港に津波が押し寄せ、車がさらわれている様子が写っていました。それを見た瞬間、顔面蒼白となりました。

幸い大津波は来ず、子ども達を避難させ、妻を連れて家に帰ったのは夜の11時でした。

後で知ったのですが、その日教会の前が津波で川が逆流し、40㌢程冠水したとのことでした。その夜は相次ぐ余震、家の倒壊・津波の心配で避難所に避難しました。こうして避難生活が始まりました。

翌日12日土曜日、福島第一原発の爆発事故。人々は一斉に仙台や郡山、東京方面に向けて避難しました。私たちの町からもあっという間に人々が東京方面や内陸に向けて避難し、町の6割強の人たちがいなくなりました。13日(日)の礼拝は、5名で守りました。

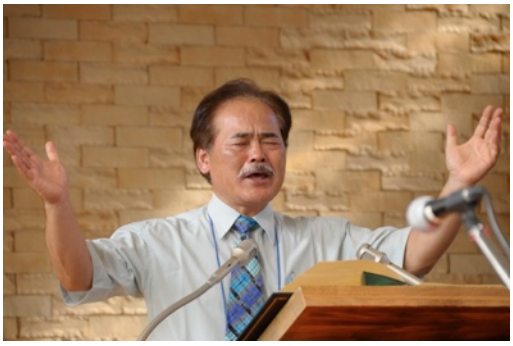
私たちもいつ避難しょうかと神さまに祈っていました。でも神さまはそのたび「まだまだダメだ」と仰いました。その間、いろんな所から「住吉さんたちの部屋は確保してあるから、すぐに避難して来なさい」との電話をいただきました。嬉しく思いました。

チェ・ドクシンさん

キム・スジンさん

ソン・エヨンさん

チェ・ハンソンさん



福島県キリスト教連絡会　副会長　住吉英治
（日本同盟基督教団　勿来キリスト福音教会牧師）

でも神さまに祈ると、まだまだダメだとのお答えでした。そんな時でした。イエスさまが原発事故の所に向かわれるお姿がはっきりと見えたのです。そしてイエスさまは私にこう仰いました。

「私はこれから原発事故の所に向かい、終息するように祈る。そして、そこに取り残された人々の所に行き、その人たちを慰め、励まし、共に生きる。」

私は即座に言いました。

「イエスさま、そんなことをされれば被曝されますよ。」

イエスさまはすぐにお答えになりました。

「私が被爆することなど問題ではない。それよりも原発事故が終息するように祈り、取り残された人々と共に生きるのだ。それなのにあなたは私を見捨てて、逃げようとするのか。」

このお言葉を聞いたとき、私たち夫婦はそこに残ることを決意しました。ただ、被曝する事への恐怖は計り知れないものがありました。（後で放射線量が少ないことが分かったのでが！）

私はここで、何か自分が特別な体験をしたとか、偉い者であるかのようなことをお話ししているのではありません。誤解の無いようにお聞き下さればと思います。

この時、私たち夫婦の他は子ども達も一緒に生活しておらず、両親や親戚の人たちも居ませんでした。このことが幸いしました。神さまの備えの中にあったと思います。

また、私が残ることができたとすれば、長い間取り組んできた人格尊厳問題や靖国神社問題が、私を鍛え、耐えさせる力となっていたことを証したいと思います。そしてこの視点は、日本宣教の根底を見据える上で、重要な点だと思います。

少し長くなりましたが、私が申し上げたいことは一点。原発が爆発した時、イエスさまがその終息に向かわれ、取り残され、弱い立場にある人たちの所に向かわれ、その人たちを慰め、励まし、今もそこに止まり、人々と共に生きていらっしゃるという事です。このことが私たちが止まり、支援をさせて頂く原点になったという事です。そして、このことは私たちに共通する原点となるのではないでしょうか。

イエスさまはご自身を犠牲にして、十字架に掛かり、私たちの罪の身代わりとなって死んで下さいました。ここに愛が示されたのです。とするならば、私たちもイエスさまの後に従い、原発の終息を祈り、弱い立場に立つ人たちと共に生きるべきではないでしょうか。

震災後まもなく、日本同盟キリスト教団や各教派・団体から沢山の物資が届くようになり、教会員や近所の方にお分けし、またお届けしました。そのことが口コミで広まり、延べ2000人近くの方が近くから遠くから教会に物資を取りに来られました。

またやがて各方面から多くのボランティアの方が送られてくるようになり、避難所への炊き出し、物資配給などを行って来ました。昨年の秋からは仮設住宅や借り上げ住宅などへ炊き出し、物資配給などを行って来ました。これは私たちをはじめ、どこの教会でも、また牧師達も行い、今日に至っています。

私たちは昨年の4月に「いわきキリスト教連合震災復興対策ネットワーク」を立ち上げ、協力して支援活動をして来ました。今でもそうです。また「いわき食品放射能計測所」を仙台と共に立ち上げ、地域の方々に利用して頂いています。また「福島県キリスト教連絡会」を昨年10月に立ち上げ、福島県全体の情報を共有し、祈り会い、特に放射能問題に取り組んでいます。

一教会、牧師では限界があり、共に協力し合うことが大切です。

あの３．１１から1年7ヶ月が経ちました。東北全体の震災後の様子はよく分かりませんが、だいぶ様相も違ってきていると思います。岩手、宮城、福島、北茨城、それぞれに被害状況も復興の進み具合も違うと思います。またそれぞれにおかれている教会、牧師、信徒の方々の状況も違うことでしょう。

ただ共通することは、皆さんだいぶ疲れが溜まってきていることと、これからどんな支援活動をしていったらよいのかよく分からないという事ではないでしょうか。

以下、私の思っていることを幾つか申し上げたいと思います。

第一に、この働きは長期戦だと思い、疲れないことです。それぞれに十分なる休息を取りながら、自己コントロールしつつ、必要な支援活動に当たるという事です。自分自身が疲れてしまっては、もともこうもありません。

第二に、支援活動をあくまでも教会の働きとして継続し、位置付けていくことです。牧師も疲れ、教会員の方も疲れてきます。そして教会の中から、牧師はもっと教会の中に目を向けて欲しい、信徒に目を向けて欲しいという声が出てくるでしょう。そのような時、バランスを取りつつ、なおも教会員と共に粘り強く支援活動を続けていくことです。

第三に、横の連帯を強め、広めていくという事です。具体的には市や町との協力を強め、各NPO団体、市民団体と情報を共有し、協力していくという事です。牧師や教会、或いはキリスト教団体のネットワークだけではやがて限界を迎えることでしょう。

第四に、被災者の方々と共生する、共に生きていくという事です。これは被災者の方に限ることではなく、悲しんだり苦しんでいる人たち

と共に生きる、共生するという事です。

「喜ぶ者と一緒に喜び、泣く者と一緒に泣きなさい。」(ロマ12：15)という教えそのものです。

私にとって支援とは何ですか、いつまでするのですかと問われるなら、こう答えます。

支援とはその方と共に喜び、共に泣くこと、そして最後の一人が自立するまでです、と。

徹底的に、最後の最後までその人に寄り添い、自立するまで共に歩むと言うことです。

第五に、福島のことで言えば、今もなお原発事故が終息するように祈り、そこに残り続けている人たちを励まし、慰め、共に生きていらっしゃるイエスさまがおられるからです。イエスさまが被曝されることもいとわず、今も働いていらっしゃるからです。

これが私自身の支援し続ける力となっているのです。

ヨハネは言いました。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになった程に、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネによる福音書　3：16)

イエスさまは私たちの罪のため、身代わりとなって十字架に掛かり死んで下さいました。ここに神の愛が私たちに示されたのだとヨハネは言います。

今もイエスさまはご自身が被曝されることをいとわず、苦しみ、悲しみ、病の中にある人たちを慰め、励まし、共に生きようとされているのです。このイエスさまのお姿は福島だけではなく、岩手、宮城、茨城にもいらっしゃるのです。

このイエスさまがいらっしゃる限り、私は、私たちは、イエスさまの後にお従いし、同じように地域の方々にお仕えし続けていきたいのです。

第二回
東北日・韓キリスト者信仰回復聖会
報告（その２）

主にある兄弟姉妹の皆様

平和の主の御名を称えます。

気が付けばもう１０月となりました。日々の移ろいは激しく、こうして御国が近づくのだろうと励まされます。お変わりなくお過ごしでしょうか。

東松島市根古 仮設住宅

９月１７日に持たれました聖会、そしてその前後に持たれました祝福溢れる日々を思い出して、改めて神様の恵みを噛みしめています。すっかり御礼を申し上げることが遅くなってしまいました。力不足を恥じつつ、改めてここに御礼を申し上げることができますことを、神様の恵みと感謝しています。

この半月をかけて、私たちは皆様のご奉仕の足跡を整理する作業を行いました。その結果、皆様のご奉仕は、実に大きなものであったことが、次々とわかってまいりました。

９月１７日の聖会をはじめとして、合計で１６回ものコンサートや祈祷会にご奉仕を頂くことができました。その参加者は、延べ数で７３７人となりました。この人数は、東北という土地柄を考えますと、驚異的な人数です。そして、小さな教会の一つ一つから、本当に恵まれ励まされたという喜びの声が数えきれないほど

聞かれました。神様は確かに、私たちの催事を通して、疲弊した東北の被災地に勇気と励ましを与えてくださったのです。

今回の催事の背後に、領土と歴史を巡る大きな悩みがあったことを、私たちは忘れることができません。そこには人間の深い罪の現実があります。しかし、十字架の主は、あらゆる隔ての壁を打ち破ってくださると、聖書は語っていました。私たちはそのことが真実であると、皆様の友情の証を通して、新しく知らされたのです。これは本当に大きな経験でした。

今、被災地は深い疲労の中にあります。震災から既に一年半の時が経ち、皆それぞれ「被災後の日常」を生きているのです。そこには悩みがあり、諍いがあり、理解しあえない寂しさがあります。大型の仮設住宅においては、日々催事が続き、物資が溢れ、にもかかわらず住民同士には深い諍いと憎しみが生まれています。他方で、中小の仮設住宅においては、日用品に事欠く困窮の現実があります。そして福島においては、深い不安の中で先の見えない日々が続いています。チェルノブイリの数倍にも及ぶ放射性物質が降り注いだとい

牡鹿半島大宝仮設住宅

う報告がある一方で、まったく安全だと語り続ける人もいるのです。

私たちは今、被災地の深い悩みを知らされています。そこには絶望へと誘う声がさやかに響き渡っています。この誘惑の声は、人の力によっては抗することのできないものだと思います。

私たちはこの被災地で、いまこそ、福音を聞く必要を覚えています。今日が困難でも、明日は神様の御手の内によくなるのだということ。この暗い世界は、しかし、神様がお作りになった素晴らしいものなのだということ。人間は罪深いけれども、神様は人間を愛しておられるということ。人生はつらいけれども、神様はいつも共にいてくださるのだということ。そうしたことを、私たちは、今、新しく福音から聞かなければなりません。

そうした今、皆様の篤い信仰と溢れるご奉仕を頂けたことを思いだし、再び豊かに恵みを覚えているのです。

大きな恵みを頂いた私たちは、皆様のご奉仕に対して、感謝を言い尽くす術を持ちません。ただ、それでも、私たちからの感謝の表れとして、一つの説教原稿をお送りいたします。それは、９月１７日の聖会の第一部において福島の牧師が語った説教です。聖会の第二部において私たちは、金会長の説教を頂きました。津波と放射能という二つの恐怖を見た私たちは、そこに神様がどんな業を為されるのか、よく見て証する務めがあるということ。そのことを、御言を通して、私たちは金会長より知らされたのでした。今考えますと、金会長からの激励の言葉に対する応答として、第一部の説教があるように思われました。それで、ここに感謝と決意の表れとして、お送りしようと思いました。ご高覧を賜れば幸いに存じます。

末筆となり恐縮の極みですが、皆様のご健康が祝され、困難な中で遂行されている尊いお働きがいよいよ豊かに祝福に溢れますことを、全能の主にお祈りいたします。

吉田隆・川上直哉

東松島市根古 仮設住宅

シリーズ 福島は今

第二回 相馬・南相馬支援報告書

東北ヘルプは、事務局を仙台に置いています。原子力電所爆発事故は、福島県の沿岸部で起こりました。 以来、福島県沿岸部と仙台とは、特別な関係に関係になりました。

爆発事故以前、福島県太平洋沿岸部は、福島市から「近い」地域と思われていました。しかし、爆発が起こってから、事態は一変します。 福島市と太平洋沿岸部の間、南北に横たわる大きな山々が、 きわめて危険な放射性物質汚染地域となってしまったのです。 結果、福島市から太平洋沿岸地域は、「遠い」地域となってしまいました。

福島県キリスト教連絡会（FCC）の皆様は、このことを深刻に受け止めました。 福島が一つとなって震災に対応しようと議論してきたのに、 高濃度放射能汚染地域がそれを阻んでいる。一番ケアが必要な地域に、手が届かない。

FCCの皆様は祈りました。 そして、この状況が、東北ヘルプに伝えられました。

今、原発事故が起こった場所にアクセスするためには、 南のいわき市から北上するか、 あるいは、北の宮城県から南下する他ない。爆発現場の北側に位置する相馬・南相馬にケアを届けるためには、仙台からの助力が意味を持つだろう。

私たちは助力の要請を受けて、そのように結論付けました。 それで今春、私たちは、皆様からお預かりしている資金を用いて、 相馬・南相馬へのケアの可能性を探ることにしたのです。

すると、日本同盟基督教団の後藤一子牧師が、教会の主任牧師を隠退して、 相馬・南相馬の被災者支援に専心しておられることが、 私たちに情報として知らされました。 後藤先生は、2011年6月、東北ヘルプが最初に福島へ入ったその時、私たちに福島の現実を丁寧に実感を込めて教えてくださった先生でした。

すぐに東北ヘルプはFCCと相談し、後藤先生を相馬の担当者として迎え、そのお働きを共にお支えすることとしました。

その後、後藤先生は定期的に報告をくださり、その報告は、相馬・南相馬地域の「定点観測」として、貴重なものとなっています。

相馬・南相馬地域には、津波被害で家を失った人々と、 原発爆発事故

で故郷を離れざるを得なくなった人とが、同じ仮設住宅に住まわれています。当初、その間には、深い溝があったのですが、しかし、その溝は次第に埋まりつつあるそうです。互いに互いの痛みを想像し合い、同情を寄せあう、そうした出来事が、仮設で起こりつつあるとのことです。

そうした出来事の触媒として、後藤先生のお働きがあること、その働きに参画させていただいていることを感謝して、9月にいただいた相馬・南相馬地域支援の報告書を、少しだけレイアウトを変えて、下記にご紹介いたします。

「福島は今」どうなっているかを知っていただく一助となり、みなさまの祈りが集まるきっかけになればと願います。

相馬・南相馬震災支援プロジェクト報告（9月）

担当：福島県キリスト教連絡会 後藤一子

９月 ６日(木)am10:00～ クラシュ：佐々木氏　恵泉教会：大喜多師 相馬：葛西師夫妻 横川姉
これからの支援は　内容としてクッキー作り、ポプリ作りなど参加型の内容があげられた。
新しく新地地区での活動があげられ、検討することとした。
２８日(金)小坂忠師のコンサートが予定され、会場となる仮設住宅を検討する。
７日(金)北飯渕仮設西集会場の区長と会うが、キリスト教に対してのこだわり取れないようだ。

１３日(木)午後クラシュの菅原姉と案内配布１８０部 その後交わりと祈りの時をもつ。
１４日(金）pm1:00 ～ 北飯渕仮設住宅東集会場　「おはなカフェ」ポプリ作り
参加者１６名(男子１人)　クラシュ：佐々木 菅原　恵泉教会；大喜多師
牛久恵泉教会：５名　葛西師 後藤　計２６名

ポプリ(ラベンダーとローズ)を円形に切った布に包みリボンとつけて造花と２，３種飾るだけであるが香りを楽しみ、こだわりをもって選んだ造花を飾りとても喜ばれた。お茶の交わりには心を開きゆっくり会話を楽しみ、その後のタオル体操と２組に分かれてのゲーム（ジェンカ―）にドキドキしながら心はずませた。ケア―としては参加者が加えられてたくさんの会話を弾ませることの大切さも知らされた。

１９日（水）午前中大野台仮設住宅を訪問。
２６日（水）大野台仮設住宅第１（１２０部）、第６（１７０部）案内を配布。
２８日（金）pm1:00-3:00　大野台仮設住宅第１　「おはなカフェ」小坂忠コンサート
参加者 １１名他２名 クラシュ：佐々木 小坂忠、沖縄～２名 長崎～１名 横浜～３名
岐阜～２名　相馬教会～３名　後藤　計２７名

小坂師のオリジナル曲で歌い出し、小雨の中から参加した方々(原釜地区)の元気な声もはずみ、海の人らしいトークとなった。彼らは津波で家を失い帰る場所のあてが無いと嘆きながらも一緒に歌うことで心開いてくれた。また、歌を聞きながら涙する方もおられて共に涙した。お茶の時の会話も楽しんで小坂さんとの交わりに心開いておられた。
Pm4:00-5:30　大野台仮設住宅第６　「お花カフェ」小坂忠コンサート
参加者３４名他スタッフ３名　クラシュ佐々木さんと小坂さん他８名 葛西師夫妻
教会２名　後藤　計５２名

前回と同じように始まった。ここでの参加者は椅子に座って始まりを待っててくれた。彼らは放射能から避難した方々である。（飯館地区）雰囲気はだいぶ異なるが楽しく過ごすことができた。小坂師のトークにも心を開いてくれた。一人の５０代の男性がヤジを入れた。少し酔っていたようだが、彼らの心は痛みで一杯、家はあっても、いつ帰ることができるのか、夢も希望もないと叫んでいた。仕事は農業だから他に何ができるかとも。

夕食が迫っていたので、ゆっくりとした交わりは持てなかったが、また、来てくれるように何度も言っておられた。この地は町に出ることもなかなか出来ないので、交わりを望んでいた。

「豊かさ」を求めて

東北ヘルプは、「支援者を支援する」ことを目指しています。この目標を考えるとき、一つの疑問がわいてきます。

「支援される人」とは、誰でしょうか？

「支援する人」とは、誰でしょうか？

私たちは助け・助けられながら、日常を送っています。今、被災地には「被災後の日常」が展開しています。その被災地において、「支援者を支援する」とは、どんな意味を持つのでしょうか。

一つの答えは、仮設住宅自治会の方々を支援する、ということにありそうです。 自治会の方々は、「支援者」であり、かつ、「支援される人」でもあります。 そうした自治会の方々の「こんなことができれば」というお声に耳を傾け、 その願いに向けて共に励むことができれば、「支援者を支援する」働きは健全な展開を示すのではないかと、 私たちはそう考えています。

「支援者／支援される人」が一つになって共に生きるとき、 そこに「豊かさ」が生まれるのではないかと、そう思うのです。

今回、仙台市内の仮設住宅において、そうした試みの一つが行われました。 担当した職員は、本当にうれしそうに報告をしてくださいましたから、 その喜びをそのまま、報告書にしてもらいました。 以下にご紹介いたします。皆様のご支援が、一つの喜びを生み出しましたことを、心から感謝して。

集会所いっぱいに広がるコーヒーの香りで、一時の優雅な気分・・・

１０月に入り、秋の虫の声響き渡る秋がやって参りました。何かと忙しく、そして体にも負担が多かった夏を乗り越えて、これからの季節は室内で、ほっとする時間を持ちたいものですね。

東北ヘルプでは、職員有志でそんな「ほっとする」ひと時を仮設住宅にお届けしようと「出張コーヒー焙煎＆カフェ」を始めました。

2012年10月3日 卸町仮設公園住宅にお邪魔して第一回目は行われました。コーヒーの焙煎は仮設の皆さんと一緒に行いました。準備の段階から積極的に参加してくださり、焙煎機のハンドルを回す度に聞こえてくる豆を煎る音と香りが心と会話を弾ませてくれました。そして、煎りたてのコーヒー豆で１０時のお茶の時間を皆でいただきました。

特に嬉しかった言葉は、帰り際に、「また、やりますよね？ひと月に一回はやってくれますか？」という言葉でした。もう次のこの時間を楽しみにしてくれている方がいる。皆さんと直接お会いして、豆を煎りながらたわいもない会話をし、出来た豆でコーヒーを一緒に飲む。 時間というものは見えないけれど、シンプルで何でもないようなその流れの中で、結ばれて繋がっていく「良いもの」が確かに見えた気がしました。

私達東北ヘルプスタッフにとっても、至福のひとときとなりました。これからも仮設住宅やイベント、集会等でコーヒーを通して沢山の方とお会い出来ればと願っております。

（2012年10月4日
遠藤・沼里　記）

「見えないもの」への向き合い方

2012年10月15日　川上直哉

放射能は、見えません。
放射能は、匂いません。
だから放射能は、私たちに不安を与えます。
目に見えないものをどう取り扱ったらよいのか。
この課題は、宗教者の課題です。
ですから、放射能は、宗教者の課題にもなります。

9月29日午後、仙台市内中心部にあるカトリック元寺小路教会で、「原発と憲法九条」という催事が行われました。
主催は、「宗教者九条の和」です。この団体は、イラク戦争を契機に、宗教者による全国組織として結成されたものです。

「宗教者九条の和」の皆様は、毎年一度、「輝かせたい憲法第九条」と題して全国でシンポジウムを行ってこられました。第八回目となる今年は、仙台で行いたいということで、「原発」をテーマとしてくださいました。仙台キリスト教連合は、「宗教者九条の和」の皆様からの呼びかけに応え、カトリック「仙台正義と平和協議会」の方々と共に、「第八回シンポジウムと平和巡礼in仙台　実行委員会」を組織して、協力しました。

シンポジウムは、所源亮（ところげんすけ）さんの講演から始まりました。

経済学者である所さんは、深刻な現状を、しかし軽妙に、そして明るい表情で、お話しくださいました。今、「経済的に言えば、原発は大きく損をするシステムだ」ということを明らかにした本をお出しになる準備に忙しくされている、とのことで、

所源亮さん

興味深いお話をたくさん聞かせて頂きました。

取り分け、チェルノブイリよりもはるかに深刻な健康被害が確認されているという疫学調査の結果を紹介してくださいました。これからその調査内容は精査されるのでしょう。しかし、私たちが直面している現実が、実に先行き不透明であることは、よく実感されたことでした。

後援を受けて、シンポジウムが行われました。

シンポジウムの司会者は仙台キリスト教連合代表の吉田隆が致しました。シンポジストは、原田雅樹師（カトリック・ドミニコ会神父）、梅森寛誠師（日蓮宗・法運寺住職）、田中徳雲師（曹洞宗・同慶寺住職）の三師と、講師の所さんでした。

原田師は、日本とアメリカの関係の中で原発の問題を捉えて説明されました。また、梅森師は、宮城県内にある女川原発への反対運動を続けてこられた経験をもとに、現状についてのコメントをしてくださいました。

そして、田中師は、今現在のもっとも深刻な状況を語ってくださいました。田中師は、原発爆発事故現場から30キロ圏内にある二つのお寺の責任を負っており、８００の檀家さんのケアを担っておられるご僧侶でした。

田中氏は、私とほぼ同世代、30代後半の「若い」宗教者でした。爆発事故以前から原発の危険性に気づいて学んでおり、お子さんがおられ、「死にたくない」という思いははっきりとお持ちの方でした。しかし、家族を遠くへ避難させたのち、福島県内に残った檀家の方からの「帰ってきてほしい」という声に応じることを決意されました。そして今、各地に散らされた檀家の方々おひとりおひとりを訊ねて回る日々だそうです。

田中さんの発言には、多く、ハッとさせられることがありました。

「こんな時こそ、僧侶は、宗教者は、働かなければならない。」

「こんな時のために、私たちはいた、はずなのだから」

「自分には役割があるな、と思いました。」

「役割がある限り、人は生きていることができるはずでしょう」

「今は、覚悟を決めるための模索を続けているのだと思います。」

原発爆発事故は、いったいどのような事態をもたらしているのか。私たちにそれはわかりません。あまりにも多くの情報があり、どれが正しいのか、だれにもわかりません。しかし、私たちに託された役割は、それぞれ、一つずつ、あるように思います。

会場の様子

ある調査によると、原発から50キロ圏内に住む人の９３％が「放射能に対して不安を抱いている」と答え、８０％の人々が「子供を外で遊ばせることを制限している」そうです（社団法人Bridge for Fukushima 7月の調査を参照しました。）

私たちにも、これから起こってくることがなんであるかを見通すことはできません。しかし、今起こってくることが何であるか、それがどんな意味を持っているかは、語ることができるかもしれません。そしてそれだけが、「見えないもの」へ立ち向かう人間の手立てなのだと思います。

私たち宗教者は、学び、語らいあい、以下の文章を纏め、発表しました。それは、今起こっている「見えない事態」がなんであるかを、言葉によって捕まえる作業でした。手がかりは、日本国憲法の前文にありました。

「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。」

この確認が、今、脅かされている。恐怖と欠乏がまとわりついて離れず、「平和」が脅かされている。それが、今の状況ではないか。

そのような内容を纏めた「アピール」は、会場で、満場の拍手を以て採択されました。

このアピール案の採択を前に、会場ではテゼの祈りを以て、黙想の時間が持たれました。　不安の中にあって、静かに自らを省みる。そうして初めて、「見えないもの」を捉えることができるのだと思います。

9月29日の集会は、私たちにできることがなんであるかを知らせる学びの時となりました。この学びは、福島の方々と共有され、この冬へと深まり進むことでしょう。引き続き、その報告をいたします。皆様のご加祷を願う次第です。

「スローワーク」と共に

教団東北教区被災者支援センター・エマオ石巻に専従者補佐として参加して

東北ヘルプ事務主任：長嶋清

私は、東北ヘルプから派遣され、日本基督教団東北教区被災支援センター・エマオ石巻での活動に、7月初めより3ヶ月、週三日ではありましたが専従者補佐として参加させて頂きました。私自身、被災地石巻の築山・エマオ石巻センターに滞在しながら、石巻の被災者達と直接関って仕事をする機会が与えられ感謝いたしております。無事、この働きが終了しましたので、エマオ石巻で見聞きし体験しことを、以下に報告させていただきます。

私は、日本基督教団(西那須野教会)の信徒ですが、昨年の10月よりキリスト教のエキュメニカルな活動としての仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク(東北ヘルプ)で事務主任として仕事をさせて頂いておりました。主な業務は、被災者への人道支援(仮設住宅の方達、外国人被災者達、放射能におびえる方達へのケア)、教会ネットワーク構築に関しての仕事などでした。以前、西那須野にあるアジア学院で、多くのボランティアの方々とご一緒の仕事を長くしてきました。この夏、エマオ石巻では、被災者支援活動に何らかの方法で関わろうとするボランティアの方々が多く集われました。その集まった人数に対して、スタッフの側の人手が足りないということで、アジア学院での経験を活かしてほしいとお声掛けを頂き、この度、三か月間の新しい業務についた次第です。

荻の浜

エマオ石巻での活動は、昨年以来、スタッフおよびボランティアの献身的な働きが進められていました。この春にはすでに被災者との関係づくりが出来ていたこともあり、特に今夏は、漁業者の多い「祝田」「荻の浜」、加工業者・勤め人の多い「渡波（わたのは）」といった地域で、多くのお手伝いをさせて頂くことができました。

台湾からのボランティアと

被災した漁師さんたちとは、時期的に大切で人手が不足し困っていたカキ養殖の手伝いに参加させて頂きました。時には仕事の合間に津波で被災したときの様子、現在の置かれた状況についてお話が聴ける大切なときとなりました。

また、被災者のお宅・庭などの草取り、畑の草刈なども、ボランティアの方々と共にお手伝いをさせて頂きました。特に、避難地域から被災者が集まってくる唯一の神社の夏祭りにむけて、参道の草取り・清掃をさせて頂いたことは印象に残っています。また、時にはまだ土の中に残っていた瓦礫の除去などの仕事もさせて頂きました。こうした合間に、被災者皆様から色々の話をお伺いすることが出来たことはうれしい思い出となりました。

その他に、仮説商店街での日よけ作りとその設置作業、子ども達への教育支援プログラム、仮設住宅でのバーベキューの手伝い作業等々の仕事がありました。

8月の後半には、エマオ主催での夕涼み会(夏祭り)が石巻栄光教会幼稚園で行われ、近隣の被災者も多く集まり盛況に行うことが出来ました。このプログラムの為に、100名近いボランティアさんが石巻近辺、エマオ仙台、神戸の長田支援センター、明治学院東村山校から来て協力して下さりました。子供から大人までの参加者に喜んでいただける、素晴らしいイベントでした。エマオ石巻の若いスタッフ達は、その中で準備、後かたづけと献身的に仕事をしておりました。私自身、彼らから本当に勇気づけられました。

7月から9月にかけては日本各地からの青年達、年配の方達の他に、アメリカ・台湾の教会の方達がグループでボランティアとして参加して下さりました。エマオ石巻は被災地・築山の中にセンターとしての宿泊場所を持っています。ここに集う日本人青年参加者の大多数はノンクリスチャンでした。この人々にとって、石巻エマオは、被災地の人々と寄り添う働きとして活動しているキリスト者の働きに出会う(キリストの宣証)大切な場となったように思います。

実に、石巻センターという場所は、昨年の東日本大震災での被災状況を今でも知ることが出来る場所、ボランティアに参加することの意味を考えることができる場所となっています。この場所は大切な役割を担っており、石巻エマオの働きは重要なものだと思います。今後とも近隣の方達、被災地域の方々との協力、石巻の教会の方達との協力の中で活動を続けて行くことが大切であるように思います。

教育支援プログラム

私は、長年研修農場の中で、そして、ここ数年は有機農業者として自立して仕事をしてきた者です。その私にとって、当初、エマオでの仕事の仕方に「まどろっこしさ」を感じていたことは事実です。しかし、被災者と寄り添って歩む為の仕事として、急ぐことなく、ゆっくりと時間をかけながら仕事をする「スローワーク」の大切さをも知ることが出来ました（ただし、道具・農具・作業機等の使い方に関しては、用途に合わせたそれぞれの用い方を今後もっと学ぶ必要があるかと思いました）。

私は以前の職場で研修の為に大型免許を持ちマイクロバスの運転もしていた経験がありました。この経験を活かし、先述した「夕涼み会」では、幼稚園のバスを運転してお手伝いをすることができたことは感謝なことでした。具体的には、駅に到着したボランティアさんの送迎、宿泊所と銭湯の送迎、被災地フィールドワーク(視察）での運転のお手伝いをさせて頂きました。

また、この三か月の期間の中で、海外からのボランティアさん達の為には、日常の通訳の奉仕、被災者との交流の奉仕をさせて頂きました。素晴らしい漁師さんとの出会い、いろいろと仕事の事でアドバイスをして下さった年配の被災者の方達、ボランティアのリピーターとして自費で何度も参加し被災者との共感を持って活動して下さった方達との出会い――これらは私にとって、とても素晴らしい時でした。この時を与えて下さったことを感謝して、報告を終わります。

「木村真紀 ”響き合いプロジェクト ”発足記念コンサート」ご報告

ライフワークサポート響 代表　阿部 泰幸

まだ暑さの残る東京目黒で被災地と被災地を離れたところで暮らす方々との支援の絆が結ばれました。

昨年発災から２か月ほど経過した頃、私の呼びかけで子供たちへ学校で使うリコーダーや鍵盤ハーモニカの支援を下さったミュージシャンの下成佐登子さんの繋がりで今年６月に多賀城で開かれたイベントで木村真紀さんに出会いました。

イベントで歌われた真紀さんの透き通った歌声、彼女の思いがストレートに表現された歌、何かが起こる！何かを起こせると直感しました。

イベント終了後、佐登子さんと真紀さんとじっくりとお話しする時間を頂け私が支援で回り対応した事例や被災地の現状をお話ししたところ真剣に聞き入れて下さいました。

彼女らの耳に届いていない被災地の現状、彼女らにはショックと衝撃を与えてしまいました。

しかしこの現実と伝えていかなければこの災害を風化させてしまう。

災害の風化はこれから起こりうる各地での災害に大きな影響を及ぼす。

そう考える私は彼女らに必死にこの地の現状を伝えさせていただきました。

その結果、８月に響が多賀城市と気仙沼（津谷）で開催した夏祭りに協力いただく事が出来、被災者さんと直接、接していただく事が出来ました。

真紀さんが被災者さんから頂いた言葉や思いを地元に持ち帰り、それを伝えてくれた。

地元での反響から被災地を離れた人たちの中でも何らかの支援をしたいが何をしていいのか分からない等の話もあり「響き合いプロジェクト」を立ち上げました。

「響き合いプロジェクト」これは、賛同者からの寄付を活動資金として、現地の支援団体と連携、東北の方々の心のサポートに繋がるコンサートやワークショップを現地で行うというもの。

この「響き合いプロジェクト」の発足を記念して９月２２日（土）東京都目黒にある「めぐろパーシモンホール」にて「“木村真紀”響き合いプロジェクト発足記念コンサート」が開かれました。

コンサートチラシ

当日は会場となるコンサートホールは満員の状態。

こんなにも沢山の人達が被災地に関心を持ってくれていると嬉しくワクワクしたのが今でも思い出されます。

記念コンサートは２部構成で１部では被災地の現状報告、２部では３名のミュージシャンと急きょ結成された市民コーラス隊の響き合いコンサートが行われました。

ここでチョット主催者の木村真紀さんのfacebookをお借りしてご紹介いたします。

「１部では　直前に大きな出会いがあり、東北ヘルプ（キリスト教系支援団体）の事務局長の川上先生がトークに加わってくださいました。

阿部さんとも仲良しでともにがんばっていらっしゃるおふたりを囲んで、司会の黒田育美さんのリードでとてもわかりやすく　他ではなかなか聴くことのできないお話しをうかがうことができました。

もっともっと聴きたかったとのお声もいただきました。時間が足りなくて　ごめんなさい。」

真紀さんのご紹介の通り川上先生に駆けつけて頂け、内容の濃いトークショーを行う事が出来ました。

川上先生に感謝申し上げます。

トークショーの中では、私が日々対応する事例を一つでも多くご紹介したい処ですが限られた時間、どうしても被災地を離れた地の方に伝えたい事がありました。

私は今目の前で起きている事に対応していく事は大事なことと考えておりますが、それよりももっと大事なことは、同じことを繰り返さない事。

近く首都圏でも直下型地震が起きるともいわれ、関西方面では南海トラフが動き出すともいわれています。

いつどこで起きるかわからない大規模災害に今回の東日本大震災で起きているさまざまな出来事を教訓に個人単位でも考えてほしい。

いざとなれば自分の身は自分で守るしかない、それを伝えたかったのです。

司会の黒田さんから今私たちは何をすべきかの問いに、川上先生からも今被災地で起きている事を知ることが大事、そして自分たちで考える事！！こんなお話も頂きすごく共感いたしました。

そして私のほうからも、この場で聞いた事をひとりでも多くの方へ伝えて頂きみんなで考えて不幸にも災害が起きてしまった場合思い出してほしい！いつまでもこの震災で起きている２次的被害を忘れないでいて欲しい！この震災を風化させないというのは被災時の様子を思い返す事ではない。

あの時何が起こったか？どんな行動がとられたか？それがどんな結果を生んだか？そして自分たちの身の回りで起きた時にどうしなければならないか？常に思い返せるように頭の片隅に置いておく事で風化は免れる。こんなお話をさせていただきました。

２部では、木村真紀さん、下成佐登子さん、盲目のギタリスト増田太郎さん、市民コーラス隊「パップス」の皆さんのコンサート。

真紀さんが発災後に作った歌「祈り」や沢山の曲、佐登子さんの懐かしい歌、太郎さんの優しいバイオリンの音色や楽しい唄。

そして沢山の市民の方が集まり結成された「パップス」のコーラスも短期の練習とは思えないほどの綺麗な歌声でした。

皆さんのこのプロジェクトを成功させたい、被災地に届けたいという思いを頂けました。

次はぜひこの被災地へお招きして歌って頂きたいですね！！

また今回の記念コンサート終了後、参加頂いた方、ご来場いただいた方がそれぞれご感想を寄せて頂く事が出来ました。

その一部をご紹介させていただきます。

「響きあいプロジェクト、参加させていただきましてありがとうございます。阿部さんにお会いできて本当に良かったです。本当はもっと阿部さんのお話をお聞きしたかったというのが、感想です。でも仲間がたくさんいると、私たちも心強く思うことができた時間でした。これを縁に、これからも響きあっていきましょう！！」

（コーラス参加の方）

「阿部さん本当にお疲れ様でした。また、有り難うございました。阿部さんの話、本当の現状の被災地の状況が手に取る様にわかりました。

こういう生の声必要じゃないかとおもうんですよね。世の中、パソコンや携帯のiモードなどが使えない人はテレビとか新聞、雑誌から情報しか入手出来ない人て結構、多いですよね。

それと僕が本当に心配しているのは、販売スタッフとして会社で仕事をしている時、関東の方ではもう、お客様から被災地の話の話題が全く出ないです。そうそれだけ、感心が薄れてきているんです。

僕に出来ることは自分の仕事でお客様と接客する機会があった時に本当の被災地の現状お伝えするのが義務かなあと思ってます。

今回、集まって頂いた方が1人でも多く、行かなかった方へ伝えるということが必要だと思ってます。頑張りましょう。阿部さんきっと報われる時がきますよ。」

（会場へ来て頂いた方）

もっともっと沢山の感想を頂いております。

頂いたご感想の中でもっと話が聞きたかった、また話を聞かせて欲しい、というお言葉を沢山いただいています。

響き合いプロジェクト事務局の方からも、次回のお話を頂いておりますので一日でも早く皆さんの処へお伺いしたいと思います。

私たち「ライフワークサポート響」は被災地での支援は勿論の事、被災地外で支援を考えている方々のお手伝いもさせていただいています。

私たちの出来ない支援を皆さんお持ちになっている。

この現実は直接被災された方々へも有益になります。

一日でも早く被災地の人たちの自立につながる支援！！

みんなで助け助けられ自助努力を促す支援が緊急に必要です。

「響き合いプロジェクト」では、趣旨にご賛同頂ける皆様にご寄付をお願いし真紀さんが被災地で繰り広げる歌による心の支援とライフワークサポート響の活動への支援を目指しています。

今回の記念コンサートにおきまして、沢山の方のご支援を頂きまた多大なご浄財もお預かりいたしました。

皆様の被災地を思う心を胸に今後も被災地の困ったと言うさまざまな問題に取り組み支援を続けていきたいと思います。

また今回のコンサートへご足労いただきました川上先生には、私どものため遠路足をお運びいただき公演開始直前までご指導頂いたり、ご来場いただいた皆様へありがたいお言葉を添えて私をご紹介いただきまして大変感謝いたしております。

今後とも太い絆を持ち響き合える関係でお付き合い頂きます様お願いいたします。

ライフワークサポート響の支援は生きる事へ直結する事が多く、また多方面の方々との響き合いが重要になっております。

沢山の皆さんと連携し被災地の人たちの支援、また今後起こりうる各地での災害に対する啓もう活動にご賛同頂ける皆さんと活動を共にしていきたいと思います。

沢山の方との響き合いに感謝！！

「見えないもの」への向き合い方（承前）
戦う人・佇む人・祈る人

川上直哉 記

10月5日、「祈りと学びのつどい」が行われました。これは、宮城県宗教法人連絡協議会が主催社となり、公益財団法人世界宗教者平和会議日本委員会の協賛を得て開催されたものです。東北ヘルプ事務局長の川上が、日本基督教団東北教区宮城中地区の役員として、この催事に参加しました。以下、放射能という「見えないもの」への向き合い方を考えながら、その催事の報告をいたします。

会場は、浄土宗寺院・愚鈍院でした。催事は二部構成となっていました。第一部は「平和と復興の祈り」、第二部は講演「震災後の現状と課題」でした。多くの宗教団体から、１００名を超える参加者があり、会場はちょうど人でいっぱいになりました。

第一部では川上が担当者となって映像と音楽を編集・放映し、震災直後から現在に至るまでの様子を共に振り返りました。そして、天理教と浄土宗の雅楽合奏を背景に、浄土宗の皆様が導師として登壇し、祈りを奉げてから、参加者全員で黙祷しました。

講演者　早坂光明さん

第二部は、富岡町にある浄土宗浄林寺住職・早川光明さんが、被災直後から現在に至る福島の様子を語ってくださいました。

富岡町は、原発爆発事故現場から２０キロ圏内にあり、強制退去区域となっています。退去の当日のことを、早坂さんは生々しく覚えておられ、詳しく語ってくださいました。

富岡近辺の海は、長く津波を経験していなかったそうです。かつて「チリ地震」に伴う津波が東北を襲った時も、水は静かに引き、そして静かに戻ったということで、多くの方々が避難する思いを持てず、そして犠牲者が多く出た――それが、最初の悲劇だったそうです。

その後、原発爆発事故が起こります。そして、長い長い悲劇が始まるのです。

それはまるで、町から人が吸い取られるような、実に不気味で不思議な日であったそうです。福祉施設の責任者をしつつ住職の職を担っていた早坂さんは、まずご自分の施設の対応に追われたそうです。そして、檀家の皆さんの様子を確認して回ったところ、ちょうど臨終を迎えたお宅があったと言うのです。「すぐに帰れるだろう」という認識でいました

宗教法人連絡協議会

から、遺体を置いて避難する、と、一旦は決めてみたものの、やはり気になって、ご遺族は夜の内に自宅へ帰り、誰もいない町で一晩、ご遺体と一緒に静かに過ごしたのだそうです。

避難先は郡山市内の「ビックパレット」という体育館。館内はまさに「すし詰め」状態。そのうち、皆それぞれ各地へと離散して行く被災者。

各地へ離散したお檀家さんの中には、７～８回も引っ越しを余儀なくされた方が少なくないそうです。最初は快く招いてくれた親戚も、数日すると難しい顔をし始める。そうして次の避難先を探さざるを得なくなる。そうしてようやく定住先を見出したと思っても、今度は子供が地域でいじめられる。耐えきれず、結局福島へ戻ってくる方もある。

そして、震災後、実に多くの人が亡くなっている現実を、早坂さんは語りました。早坂さんは僧侶として、震災前、年間約１０件の葬儀を行うのが常であったそうです。そして震災があり、津波で亡くなった７人の葬儀を行った。しかしその後、一年半の間に、３１件の葬儀を行うことになった――「次々と、人が亡くなるんです」「日々人々は憔悴の色を深めています。先日は６０代の元気だった人が大動脈解離で亡くなる。別の６０台の人は慢性呼吸器不全で亡くなる。それぞれ99歳と88歳の父親を遺して亡くなる。残された父親の無念を思うと、言葉も出ないのです。」そう、早坂さんはおっしゃいます。

そして早坂さんは、次のような言葉を語られました。

「今のたうちまわっている人がいる。もし宗教がその人を救えないようなら、そんな宗教は要らない。」

この早坂さんの言葉を聞いて、私は「輝かせたい憲法第九条」と題された９月２９日のシンポジウムを思い出しました。シンポジストの田中徳雲さん（曹洞宗・同慶寺住職）の言葉と同じ響きがそこに聞き取れたからです。そして、そこに私たちが今しなければならないことが示されているように思いました。

早坂さんは、ご自身が避難生活を送るかたわらで、「原発事故被災寺院有志の会」事務局長として活動を開始します。東京に足繁く通い、東京電力の方々と折衝し、国会でのロビーイングを行う。すべて、被災者の生活を支えるためです。「この国の指導者に、使命感も責任感もないのではないか？」という深い疑いを日々強めている、という言葉が印象に残っています。そうした現実に対峙して、早坂さんは戦っているのです。

南相馬の二の寺院を預かる田中さんは、これと対照的に見えます。離散して寄る辺なくなった一人一人を訪ねて回り、月に一度は同慶寺（原発爆発事故現場から２０キロ圏内）に皆で集まって、掃除を行う。「それは心の掃除なのです」と、田中さんは静かにそう言っていました。

被災の現実と戦う早坂さん。被災者と共に被災地に佇む田中さん。

私たち周辺にいる宗教者は、何ができるでしょう。

今回、研修会は「平和と復興の祈り」を諸宗教合同で行いました。私たちは現実を前にして何もできない。当事者と言い切れないけれど、無関係でもいられない、じつに「中途半端」な立ち位置にいるのが私たちです。しかし私たちにはできることがある。それは、戦う人・佇む人を覚えて、祈ることです。一つになって、そうした人々を応援し続けることです。

放射能という「見えないもの」への向き合い方は、どうあるべきでしょうか？――この問いに対して、その答えは、きっと多様なものになるでしょう。「戦うこと」と「佇むこと」のように、両極端に分かれるかもしれません。しかし、それらを一つにつなぐことができればどうでしょう。いや、一つにつながなければ、この事態に対応できないのではないか。一つになって行かなければ、「見えないもの」に立ち向かうことは、できないのではないか。

「戦う人」のお話を伺い、「佇む人」を思い出しつつ、諸宗教者が共に「祈った」。そのことを大切に思いながら、研修会の報告とさせて頂きたいと思います。

平和と復興の祈り　参加者の様子

不安に抗するために

川上直哉　記

震災から１年半以上の時が過ぎました。

気が付けば、２０１２年の１０月も終わろうとしています。

時の進みの速さに驚きながら、

一方で、発災直後がつい昨日のようにも思われます。

時間の変化が激しいのは、津波被災の現場に立つと、強く自覚されます。津波に関しては、震災が「終わった」ように思われます。津波の痕跡は、すさまじい勢いで消えて行くのです。そして、震災に起因する大きな苦しみが、新しく生起している。今、津波被災地のほとんどの場所で、既に「震災後の日常」が送られています。そこには深い孤立の苦しみが生まれています。それはつまり、時の流れの速さについていけない自分がいることを発見する苦しみです。忘却の淵に沈み込みそうになるような思いがある。そして、胸の中に残った悲しみは、いつまでも「震災直後」のままにある。――そうしてそこに、引き裂かれるような苦しみが生じているのです。

それと同時に、被災直後から遅々として進まない時間の流れがあります。むしろ、今まさに、徐々に「震災」の姿が明らかになりつつあるような、そんな不気味な現実があります。それはつまり、放射能被害です。

津波被害は、既に起こってしまった「震災」から生起してくる苦しみを人々に与えています。それは「孤立」という苦しみです。

放射能被害は、これから時間をかけてその全貌を示し始める「震災」の不気味な予感を以て人々を苦しめています。それは「不安」という苦しみです。

この二つの苦しみを分けて考えることが、これから大切だと思います。

さて先日、「不安」の中にある苦しみを語ってくださる機会に、私たちは立ち会うことができました。今、放射能被害の中に生きる人々は、どんな思いで過ごしているのか。それを聞きたいと願う私たちのために、福島県キリスト教連絡会（FCC）の皆さまが、「福島の震災を語る会」を開いてくださいました。私たち東北ヘルプは、その開催のお手伝いをさせて頂きました。

僧侶の森田さんが、福島県キリスト教連絡会が開催した「福島の震災を語る会」の報告書を、書いてくださいました。森田さんは、仏教者として、キリスト者が主催し参集した会に、参加してくださったのです。そのことの意味は、小さくないように思います。

備えあれば、憂いなし――「不安」に抗するには、「備え」をするほかありません。「備え」とはなんでしょうか。それは、連帯を作り出すことです。つまり、いざ「パニック」となるような事態が生じた時（そうしたことが起こらないことを願いますが）、すぐに連絡を取り合い機動的に対応ができるような、緩やかでも広い連帯を創り出すことに、尽きると思います。

今、東北ヘルプは、FCCなどと共に、そうした広い連帯を創り出そうと試みを続けています。既にホームページにご紹介したとおりなのです

が、私たちは既に、９月１７日には韓国の諸教会との連帯を創り出す一歩を踏み出しました（第二回日韓キリスト者信仰回復聖会）。そして９月２９日には全国の諸宗教者との連帯を創り出す一歩を踏み出したのでした（「原発と憲法九条」）。さらに、その歩みは展開しました（１０月５日の研修会「祈りと学びのつどい」）。

そして、１０月８日にはFCCの催事があり、そこに仏教者の参加があったわけです。

連帯を広げる歩みは、これからも展開します。その大切な一歩として、森田さんの報告を以下に掲載します。私たちの歩みを知っていただくのみならず、何よりも、福島の痛みを知っていただく一助として、ご高覧を賜れば幸いです。

「福島の震災を語る会」 参加報告

文責:森田敬史

快晴に恵まれたこの日,福島県須賀川市にある東北宣教センター「須賀川シオンの丘(写真1)」において,「福島の震災を語る会」が実施されました。10月7日に,拡大FCC(福島県キリスト教連絡会)や支援者の集い「被災地における宣教」があったため、前日より泊まられている先生方が多く見受けられました。

(写真1:メイン会場となった「須賀川シオンの丘」チャペル)

福島県の各所の先生方が集結され,それぞれの被災当初の様子,そこから現在までの道程,これから向かっていくところ,の三 点を中心にしたディスカッションが,全体会,グループ別討論に分かれて展開されました。キリスト者を中心とした会であったため,私が把握した範囲では,他宗教者はともに仏教者である東北大学の谷山洋三准教授と私だけでありました。それでも,会が終わっ た後,「よく来て下さいました」とお声かけ頂いたことで,“ここにいても良かったのだな”と最後になって溶け込めた感じを抱きました。

タイムスケジュールとしては,午前9時からオリエンテーションと「語る会I」が始まり,午前11時から「語る会II」,一時間半の昼休憩を挟んで,午後1時30分から「語る会III」,最後に「みんなで祈る時」という全部で四部構成となっておりました。

オリエンテーションにおいて,参加者総勢70人が集まっての議論は発言の機会が少なく,グループに分かれることにより,それが効率的に行われることを,FCC委員長の木田恵嗣先生より説明がありました(写真2)。「語る会I」は,震災から今までを語ると題して,小グループが合計4つに分かれて(私が参加したグループIIは聴衆を入れて,およそ20人がチャペルに残り,ディスカッションを行いました),予め準備された質問項目として,「1地震が起きた際の様子」,「2地震の直後,どうされた?」,「3福島第一原 発の爆発後は?」,「4放射能増加によって・・・?」,「5印象的な出来事は?」という問いがあり,それにしたがってファシリテーターの方で発言内容が広く深く熟成されていきました(写真3)。

(写真2:オリエンテーションの風景)

参加したグループIIの参加者からの意見を中心に感じたことを述べます。質問項目12につきましては,礼拝が終わった時間帯であったり,遅い昼食をとられている最中であったり,と昼すぎのごくごく当たり前の日常を送られている時間帯であったことが窺えま す。その際に,ご家族のことを想ったり,あるいは“神さま,どういうことなんですか!”と大声で叫ばれたりと,その瞬間は特に家族の一員として,あるいは信仰者としての思いを吐露されていました。また,地震直後に車にいると,近所の方から「外に出ろ!」と言わ れ,見れば道路が地割れで寸断されていたこと,二階の窓から黒いものが見えて,“一体,なに?”と思っていたら,それが津波であったこと等,どれも実際に現場にいないと分からないことを次々と発言されていました。

ご近所の方から「教会は高台にあるから大丈夫だ」とお声かけを頂いたこと,逆に,「教会には神さまがいらっしゃるから大丈夫!」と近所の方々へ訴えられたことから始まって,地震

(写真3:グループのディスカッション風景)

後,神さまが建物を与えて下さったから,そこでの受け入れを考えていたが,実際は近所の方は他の避難所へ避難されていたり,逆に,教会に教会員や近所の方々が10人ほど避難され,一週間ばかり生活を共にしたり,あるいは避難所になっていた教会からは離れることができなかったという意見まであり,どれも教会が避難所として機能するかどうか,教会員やご近所の方々をどう支援していくか等に対して瞬時の判断を求められていたことが明らかにされました。幸い,会場となったシオンの丘には各方面からガソリンをはじめとする様々な物資が集まっていたため(そうは言っても,チャペルの天窓のガラスが下の机に突き刺さっていたそうですが),当初はそれをどう有効利用するか,何を優先させるかということを相談し,シオンの丘を拠点にして各地に支援を続けられていたそうです。

質問項目34に関する放射能のことについては,当初,原発が爆発するという噂が方々で流れたり,地域内では様々な情報が錯綜していた様子で,何を頼りにして良いのかが分からなかったりと苦悩された現状も紹介されました。県外から支援に入られた方がすぐ帰ってきなさいと言われるほど線量が高いようだと知り,子どもだけでも避難させなければならない状況なのではないかという不安が増大したこと,結局子ども達を県外に避難させるため,その段取りを整えていたこと,いろいろな情報から効果的ではないかと考えて,自宅の窓をテープ止めしたこと,具体的な数値が出てきても,それが一体何を示しているのか,どれほど危険であることなのかが分からなかったこと等,まさに福島県という地域に特に生じた放射能という独特の問題により,収集した情報をどう処理したら良いかが分からず,ただただ限られた知識から現状に適した方法と思われる判断をそれぞれが下されていたのではないかと感じられました。その苦悩の中,自分を頼りにして下さる教会員を放ってはおけないが,教団からは避難しなさいとの要請がくるという究極の選択の中で,自分はどうすれば良いのだろうかと板挟みの状態になっておられた方もいらっしゃいました。

ライフラインに関しては,全然問題なく大丈夫だったという地域もあれば,一週間から三週間ほど駄目だった,その日の夜から電気は復旧したという地域等もあり,それぞれの地域や被害状況により様々でした。それらが復旧したことにより,例えばテレビやパソ コンが使え,情報を整理する事ができた面と,情報過多の状態から余計に混乱を招いたこともあったようでした。実際,ラジオは「屋内に居なさい」という情報がなく,かなり情報が制限されていたのではないかと疑いたくなるような情報量であったのに対して,テレビの方がいろいろと情報が豊富であったようでありますが,情報量が多すぎてそれを整理するのが逆に大変になり,その結果,十分な状況把握に至らなかった,あるいはテレビそのものを見る暇がなかったという意見もございました。そういうメディアを使う方法以外に,例えば,地震発生の二日後の日曜日に,それぞれ持ち寄った情報を交換したり,共有したりされていたようです。

他方で,教団の方から風向きが変わるように祈りなさいという教えがあり,13~14人の共同生活者(三割ほどがクリスチャン)がみんなで祈りを捧げたとのことでした。その発言の際に,ファシリテーターより実はこれに関して石巻の寺院でも,朝のお勤めが共同生活における秩序を保ったのだという情報が与えられましたが,風向きが変わることはもちろん望ましいですが,それよりも共に祈ること により,スムーズにその場にまとまりが実現できたのではないかと感じました。

質問項目5については,震災後の賛美歌が胸にしみわたり,震災後の語りをみんなで共有したことにより繋がりができ,それぞれがそれぞれを支えることができたというかなり大切な部分について語られる参加者がいらっしゃいました。

震災直後から様々な判断を迫られていた方々が多かったわけですが,その判断に対して,あるいは自分自身の考えに基づき発した言葉によって傷ついておられる方もいらっしゃいました。ほんの一握りの意見ですが,子どもが小さいが,家族が離ればなれにな るくらいならば,家族が一緒にいることを選択したという方,一番線量が高い時に,子ども達を外に出していたことが今でも罪責感となって残っている方,他地域から来られた方に“スクリーニング”を受けてきたかを尋ねてしまい,それをずっと後悔し続け,神さまにも ずっと悔いている方,そのよう

(写真4:午後のグループ討論の風景)

な何かを背負って今も生きておられる方々がいらっしゃるということが紛れもない現実なのです。

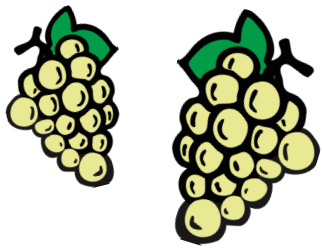
昼休憩には,焼きそば,たこ焼き,たい焼き,綿菓子が屋台風に準備され,参加された先生方の中からも調理に参加される先生がおられ,すごく和やかな時間が流れておりました。それぞれの屋台において,用具からして本物志向であり,一時は行列ができるほど賑わい,皆さまがおいしく召し上がられていました。一段落すると,そこかしこで初対面の挨拶から久しぶりの挨拶まで,青空の下,本当に気持ちよく,まさに屋外ならではの時間をそれぞれが満喫されている感じでした。

午前中のディスカッションを踏まえて,今後のことについて,再度グループ単位で場がもたれました(グループIIは,聴衆も一人ずつ発言する機会が与えられました)(写真4)。これからのことでは,もう引っ越しも自力では出来なく,仕事もない場合が多い高齢の方々の支援をどうしていくか,心のケアという言葉がよく取り上げられるが,助けに来ましたよということでは,完全に相手にされないだろうし,何も出来ないということで寄り添うことが必要になってくるのではないか等,本当に切実な課題が浮き彫りにされました。

それら一連の流れを受けて,「みんなで祈る時」において,“神さまがいらっしゃり,みんなで支えていこう!宗教者自身も被災者なんだから・・・”という言葉が表現しているように,祈りの中に生かされていることをしみじみと感じることができたわけです。

全体を通して本当に辛い話ばかりでした。同じ被災地という捉え方では決して言い表されない問題が次々と語られました。そんな中,印象的だったのは,「祈ることにより,黙って人の話を聴くことができる力を与えられた。」という声が象徴していますように,まさに祈ることを大事にされていること,そして祈る力の偉大さをしみじみと感じさせられたということでした。一方で,誰も非難することはできませんが,宗教者として,また人として,その当時の行動について,今も悩み苦しんでおられたり,宗教者(あるいは信仰者)としての自分を振り返った際に,果たしてその与えられた役割を果たすことができていたのであろうかと自分自身に問いかけ,その償いの ために,今も何かのお役立てができればという思いをもって支援を続けられたりしているという声も聴くことができました。祈りに支えられているとはいえ,宗教者(あるいは信仰者)であっても,一人の人間には変わりないことを痛切に感じました。

また,仏教者としての立場から最も感じたことはキリスト教者の集まりに対する違和感ではなく,むしろそれぞれが大事にしている宗教的背景は宗教者としての基盤の上にのってくるものであるという確信でした。どの宗教でも,どこの教団に属していても,宗教者という役割において,まずはなすべきことがあるのではないか,求められるものがあるのではないかということが問われているのではないかと思われました。

そして,今回の福島県における語りの中で,今まで参加させて頂いたシンポジウムや講演会と明らかに違ってみえたのは,やはり放射能の問題でありました。これまでの議論と比較して,どうかではなく,根本的に違う捉え方をしないと,問題の核心自体に到達できないように感じたのでした。まさにタイトルにもあるように,“福島の震災”を語るということなしには,根本的な復興や復旧とは語ることが出来ないのではないでしょうか。支援がかなり減少してきて,小さなカイロで喜ばれる震災当初の心の状態に戻りつつあるかもしれません。今一度,支援ということについて,宗教の枠組みを超えて,われわれ宗教者が考え,そして行動や実践に移していくことが求められます。一つ一つは小さなものであっても,それが蓄積されれば,いずれ大きな流れになり大きな働きになるのではないかと,細々とでも息の長い積み重ねの大切さを再度確信いたしました。

合掌